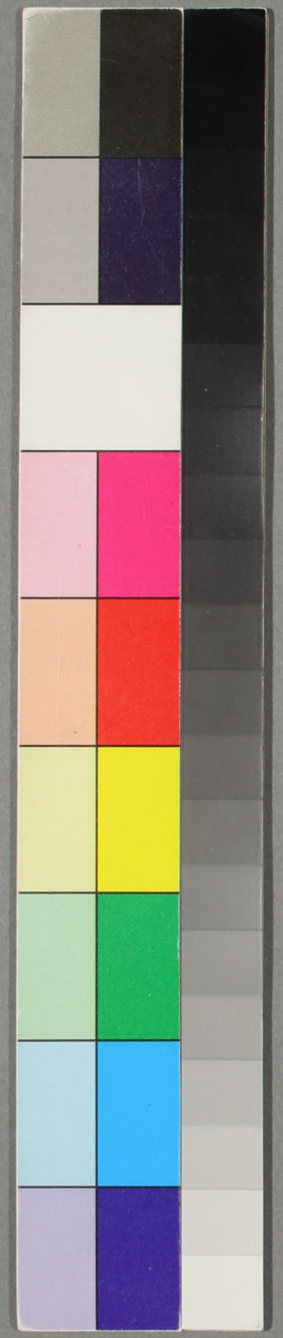


へ 5
6536

展陽雲米叢文庫

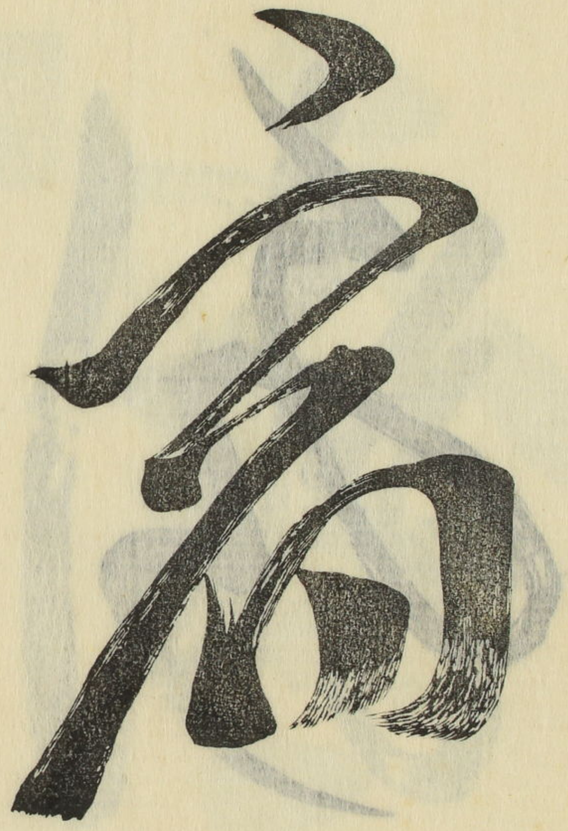
八木書店

八木書店

へ5
6536

0101860-1784

研學



羣馬縣令正五位揖取素彦君書

風雲集二編一名雅集

秋年

悔庵為流篇

蓬萊社諸子各携詩稿一冊
吟旧事感慨多年之作
余閲竟題之以帝寵令德比
類乃工書去年秋余卧
世變之門踏泥塗如
乙亥

晴天鶴

吸ふ息も白みて古寺の風深し　青

さてもまた枯たる萩の細き　漁

世の中を紙衣の秋をおもひ　青

雲のたなびく山おろし　漁

たそがれ時は雪と降りの雲掛り　青

窓の数の暗うなる頃　漁

をりふしも来ぬ人の月　青

咲る花なき春ぞ恨る　漁

汁の実に蕨を煮て客を　青

うながすおりふしの雪　漁

家建の頃を思ひ出す村の事　青

雨と降る古墳のあるかな　漁

名は列をなす古境の春　青

子代にうまれし里の行末　漁

名十八

春之部

雪ちやへ江ゐ柳ほころ　東山
谷の戸やまき雲の人心　琴路
霧のうち雪ふむ家雲ゐ峨丈
頃雪歌雲祝くや私の人　竹雨
ふ雪雲ゐ雪ゐ雪時々　雪
夜い雪ゐ霞ゐ雪の雪　雪里

花ともう雪ゐ濁ゐて雪　宝玉
一雪ゐくゐ雪ゐ雪ゐ雪　雪
雪めくゐ雪ゐ雪ゐ雪　雪
和田峠を越ゐた是日一日　烏暁
流を出ゐ雪ゐ雪ゐ雪日雪　岡山
下陰や様ゐ雪ゐくゐ雪　千亀
ゐくゐ雪ゐふゐ雪ゐ雪　雪
東清や水深ゐ雪ゐ雪　有柳
村の花　竹南

[illegible]

[illegible]の雁すでに来りつるや　文治

秋は待つものや雲の玉章　玉樹

黄ものの雲路を指て行雁の　樹亭

うつしもて雪に面ちる垣根かな　春海

雪や壁を霧の影ぶけ　元寿

黄ものに首うみ雁の月世界

雪や都に物うき　明海

うつしもて雪に動くや日和雲　松桃

黄ものや波の濁りし時のうら　一徳

曙し猫もすたて恋をする　茶里

此すまに縄をたくる猫　波葉

柿の雲やゝ薄りし程　雲花

松ちるもうつる岡の柿　霞亭

雪窓ひに書よ　　成積
茶ふくまて暖も　　松濤
此里ハ至廣も白　　南立
梅の香や椽よ　　秋光
羽織ゟ一里戻る　　如月
提灯我袖へ　　東波
隨ふと拵んた　　月堂
梅をるや拵ゟ　　吾好

山ゟ北ゟ就て　　梅の竜　　五風
やまもとまるの　　竹園
明日の梅紅　　一琢
梅の雪ん影ふり　　多住
岩倉ゟ往めぐや　　福丸
納ふまい神よ　　竹恵
汚ゟの袖ゟ　　一亮
世の中や梅ゟ　　秋

紅梅や　　松月

熱海客中

梅の香や　　永機

うら富士　　雪芝

木母寺や　　旧蒲

人の来る　　雪蕉

一面に　　清渓

汐汲ふ　　来坊

十六夜　　光亞女

月さえて　　眉丈

濡色の　　志樂

柳　　久義

あしもとの　　乙義

俳諧の　　桂岱

心ある　　牧雄

うら門柳　　東東

遊ちまいろうあと　　塘ら乃　霽が　玉蕉
行くしまき　家社引　主樹の　琴江
露の菅や　あるまるも　かう余る　五郎
下萌や　汚きのろうも　向山　南山
ろうと萌や　ゆくく代々　しまき　邑邦
家萌や　雪社ろうる　ゆかかう　当朴
美州に　仏なけ　井あり　捨る雛　様書
ろうの家社よる　雪なし　引歌風が　亜瓢

美州ふるまきろうる小葉垣　如案
ろうの家やおろうなし人のさ南　看山
奥の名残捨　一覇もろう家　久雄
東乃まき　買てる紳る独活芽が　笑の
日社恵ろうけ　亜あり萌ろう　東明
弱等明や　俳写山の樫下　嵯山
暗山や日毎に雑ろの峰　和田山　湖ろ

棒ふり一姫の笑ひ初めしこと　吟雫
蝶ふたつ風もあるかに杉木立　文璞
雲ちぎれ飛んで林檎の花ざかり　乗二
畑ある人を見かけて蝶来たる　周竹
菜の白き雨となりたる蝶雲荘　南畝
村雲のつねに揚雲雀坂　雲
高野山ゆきさき定む蝶の宿　杉雄
新雨や朝寝うれしき蛙鳴　秀村

物変
文璞
乗二
周竹
南畝
坂雲
杉雄
秀村

兼ても雲の上なる梢の雄うれ　双嶽
ふりそそぐ雪も雲雀の雄ごころ　庭風
蜂ふたつ雄花雌花飛び交ふ雨の昏　梅雄
鰐りや雲ゐの雁に雲ゆく友　文友
乙字の葉も黒ずむ雲ゆく森の秋　一二三
雪の家やまぐれ林檎雲の如　乗二
雪解一雨ゆく雲の如く鶏鳴く　等柳
指さゝぬ馬刀貝多き雲の如　素民

五十六雅集

秋おもし池ありて雲の松　雪松

秋の中に苔ありて月の柳　柳川

からくして来る里の人の夢　風邪

雁なくや夢の如き所　千和

寒行や顧ぶる生涯　曙湖

出一指す候あらおて梶の花　露石

汐風ありて梶乃葉　月友

夕つくや陳ぶる花の一吟　一夢

書ありて雨余なり書の窓　巴人

花ありて星見ゆる書よりの夢　一碧

雨ありても雁のつく稲の穂　林生

上林

降ありし秋の孫掛よき花ぶ　烟雲

雪ふ

ふさぎて糸にうけまき花吟　ぬ雪

英雄
女文
文琴
琴舟
笠雄
仲毎
昇
一管
琴雄
菱洲
琴湖
拙山
詢芸舎
也斗
圓山

物云うて一人ものこり霞かな　嬰児
蚤の雨秋もうらゝの隙もなき霞　文蒼
うらゝかや雲のゆきゝや八重霞　梅渓
山もとく大工も遠くすこし雨　曉友
霞むや聴や牛飼童あるの声　雪石
あけゆく霞る湯槽や夕霞　多石
風いたり打よる人みな霞　納々
笠もるゝ沾ふ袖もうるゝ霞かな　雪美

まゆみうつ日も霞よりうり風　雪恵
うつの年や風ふうつよこのある日和　碧外
初午や家屋もうつ屋敷もち　五岳
結綿姫やおうた様の御誕生　精古
春日野の新羽をとひて童石帆　春重
結綿姫や惜子授けまゝきゝ　唯一
御寺やうつ八陽もうつ山もうつ　京古
新吉原三新もうつ初午　静浦

百化
猫碓
書淵
卯月
子義
梅雨
琴嬉
巴鯉

蝶翁
塩吉
好古
鈴水
乙刻
唫路
清志
琴鯉

[illegible] 拍圓
地雲の [illegible] 桑古
[illegible] 菟中
[illegible] 大畊
[illegible] 万鋪
[illegible] 坪月
[illegible] 一風
[illegible] 上毛 楊堂

[illegible] 如象
紫 [illegible] 生海
[illegible] 古訂
書の月 [illegible] 一笑
我門へ [illegible] 柳徒
[illegible] 琴多
本戸 [illegible] 月
[illegible] 李湖
[illegible] 菜文

掃除して…… 簷竜胆　葉牡
…… 蕾の …… 蕾ふくら …… 葵連
…… 際 …… 永 …… 楓三
…… 山 …… 蕨翠
…… 朝 …… 智秋
…… 料理 …… 玉高
…… 古風 …… 好琴宮

…… 日 …… 雲今
…… 家 …… 谷朗
…… 如 …… 羽雪
…… 生 …… 神龍
…… 好く …… 緑園
…… 離 …… 阪古
…… 離 …… 手龍

謡皆歌ひ了る小口切り　本
又たゝきおりふし橋姫の新　添
ゟ川雪ま森ゟ神ゟ社ゟ　本
至廣仕ゟ嵐止む　添
つくのゟ梢ゟ来迎の小高合　本
動ゟ我を打ゟ發生の才　添
風ゟむくちゟい扨も月ゟ雲　本
四まてゟ松の梢ゟ葉ゟ　添

ゟら松ゟ森ゟ　本
葉ゟ梢ゟ小枝の遠雪　添
陽ゟゟ雪ゟ紅ゟゟ　本
緒の暁空ゟ　添
ゟゟ梢ゟ園ゟ苑の苗　本
古ゟ深ゟ幣ゟ　添

夏之部

領ふさぐく鞭に西うや杜芙　杜うら五　乗海
男ふ号ふ社屋のやうやうつ　梅恵
ちう時に標のうつや苓子畑　正雄
一八や朝の雪ふ　野芳
吹あう風の廣さや麦の杜　接杜
雨好や芙蓉ふうの沸うう　就孫
澗寒芙蓉ふうのうりの新　雪恵
芙蓉院新ふ子持に脚ふ筆　夏木

山のすや水芙蓉ふ津毛　文香
下闇や神へのふ泡井の辺　蓬宇
野のふやうく景めふ一章姓　玄徴
井社苑城用當や風　井丸
毎ふて幸くふうや苑邸の朱　珀雲
陳うら句紀城雁くふ梗の新　保山
峰ふ第山姫句しふ柿の花　東湖
ちう近ふ新くうふ柿の花　黛山

雲のあるときもまた 残雪
水ある手拭雪よ 逃いまし 雪雫 鴛風
帰庵に所のこうる夫婦の 一晋
稿育ん新そうな 新うぐいす詩 清風
日宮井や朽る跡うし 蔓の株 蜜月
帰帰や掛に自のうまて 林恵
朝のおこみて詩本紙をうり 有秋

心よき客や 毎 一夜酒 雪丈
雲切てぬくうし 第うぐいす 梳ん
到くく時雪よ 新の日午 林義
看経我や たる毛日午 雪好
白い孔遠て 白い辻 鶯好
雪多ぬ い到 松家
五月雨や 旅て 喜集
きたなまに 流雲

朝寒や鉦小寺の五月晴　春雄
梅雨晴や水をそそぐ池の雪　曹学

葉ざくらや蓮見る寺門の苔の花　唯山
葉ざくらや蓮見る寺門の苔の花　素子
春秋や重ね屋根ふく屋根葺　墨丈
噴の外活きる田植うれ　遊糸
茅屋

雲の峰活きる田植唄　旭扉
とのくもちの雲の雲間かな　不二
足跡の雲間雲間や新墓山　愛鷲
午一鈴の多い門や横の花　西葉
晴ると雲透て雲の峰　維峰
暗闇や春もさゝやく横の花　遊泊
噴蓮の雲る暁は蓮の雫　乙羊女
板の雫る雫胡庐かな　耕山

つゆ初て更ゝ通ひ深ゝ冊衆

白雨やまつとうちや日ぬ白ゑ芳高

ふる程猶ふるやふたの山仲通

ま山をこえやうやう夏も雨ゝ女助場

秣の雪ゝ御舟迄ゝや夜の月生秋

あんくもふたを待て小夏の月柳枝

雲おゝて歌ゝ北ゝ東ゝ正義

さむるうらゝ自慢ゝ海雲扇写載

雲浅ゝ雲ゝ峯ゝたゝの虹ゝ 網笑

月秋ゝ牧ゝ中ゝ小雪 驛重

ゝゝ燥ゝ秋ゝまゝて井ぬ人 梅吟

降ゝまゝ張ゝて添ゝまゝ庵ゝ九ゝ 西ゝ稿雪

月添ゝ向ゝの屋ゝ線ゝゝゝて 抱流

客のまゝをかゝて雪ゝや納涼蓑 三定

出ゝゝ行ゝゝゝまゝ新光夕納涼 李流

秋ふけて杉のゝ納涼ゝ 葉国

年々人間ノ陰歩ヲ
師傳ノ淵ヲ
探ル事
亡高ノ宮ヲ
至リ而ヲ
家康ヲ敬ヲ
格度ノ屑ヲ

年
ヲ
年
ヲ
年
ヲ
年
ヲ
年
ヲ

年々ノ到ヲ
陰ヲ
石ヲ
ヲヲ
ヲヲ
ヲヲ
一ヲ

年
ヲ
年
ヲ
年
ヲ

一ふきの末葉を添る和哥
うき舟にて深き夜の雪
押うすもおもふ跡の月の雲
行末へ松のつゆの雪

雲
古
晴
雲
古
晴

ウ方角を引板
おもくて稲味よろこ
俗ひて蔵る
局の雪
初午の参詣
雪ちかくなりて二度参
雪ちかくなりて
名月に雲
只ふりのこす庭苔

雲
古
晴
雲
古
晴

君を待つ秋の寂しき	晴
立ち寄る郷も同じ誠なり	曇
花水の流れ清きを	古
手折りて見れば露の薄き	晴
門（ナヲ）又持ち出でん種つる	古
古き垣根も新たに	曇
笹の色を深き屋のつま	晴
萱ぶきを結ぶ秋風	古

烏帽子紙漉き初めにけり	曇
暁の霧も雪をさそふもの	晴
夜三月烏瓜のふくら温泉哉	古
社迄雪をそくの鳥	曇
雲うすき日ふる雪哉	晴
如是我聞の初春	古
雪の中如来の御力のまのあたり	曇
寒三日入る客	晴

蓮池や字ある雨の音　雪圃

こゝかしこ雪のかゝりに雪の梅　嘉月

新雪に雪しづく落ちて雪の笹

一ひらの大きな雪や松の雪　半楊

活花の赤みを見せて八年雪　晴所

ひらひらと雪きらくと　芥空

聖堂に松と水とに雪きらくと　東京　吟古

遠almost左まで雪きらくと　上毛　月汀

雪きらくと歌ふ声雪の音　豆園

雪や闇と対する気のちらく　二十中　一芳

雪一時や月に出陽の庇ふり　碩水　柳風

引きて字書く雪や古山

強雪やちらちらと風の吹く　峯子

降つゞく一人ちらちら晴ぬ　二葉

降ぬ内！雪と晴ぬ内！雪や牛肥桑植　一弾

西へむく情ぬる日和の朝　井桂

遊つめて寒に入るの朝　陽亮

海底やつくく海鳴の雲星

人の世を寒しと秋の旅桂下

南方吟　壮人涼線　志乃雪

おく露のそこよ哉因姫　雪峰

銘虹の風にたつ竜田山　珍里

水雪よおく霧ふり一歩

物影高き秋の石苔

蜂の巣や垣物売の上茶屋北橋

秋風や湯屋水汲庭をふく對雪

あさつゆやふり残りの日雲仙

秋風や提灯ともる桂云

蓑おろす屋根しのゝめの風文好

寒さ哉水汲む秋の家寛

梅月

久我雪

月汀

栄秀

玉枝

秋紅

芙華

出てゐる白い雲の　玉川
ゐたゝきもある　弱法師の舞　言風
雪もまた〳〵多し　その雪の玉　陸奥
節は横笛　風のなき夜の雪也　乾亭
鴈の雲や雲にまぎらふ風の雪　芦夕
初午やの日の人　鴈の波　桃古
鴈前や岸も　連もの連ら　桃仙
日の雲て　ゐる星　鴈を越ゆる雲　雪後

鴈うすや暗うなり行く氣を雲て降　鴈丈
あるまゝもなく小雨　紙子着て一味
井山居
松坊や新酒の香の蕎麦畑　雪芝
暗さや笠よりくゞる梅南
暗いやもたれ合ふ竹の松　松亜
隣うまで高の荻やかく話　乾山

雪ふりて淡路や雲も動くなり　又墻
まゐ春雨や雨の音　北閑
初雪や舟一商ひの籠の雪　齋吟
雪ふりて淡路や舟の通ふ夢　杉洲
降雪や海のうれしき淡路夢　嘯牙
森閑や雪の細くも動く音　青渕
雪ふりて我音絶ゆる津鳴の里　栗之
雪ふりて淡路や雪の通ふ夢　俊又

年ふりや蘭の雪や蝶を夢　驟湖
降初てふりつゞく雪や軒の竹　竹葉
夜嵐の雪ふりつゞく梁山　移山
夕日さす山やかすかに紅葉散　義風
うら枯れて虫を埋むや雪の音　五年
初雪や灯一つ見ゆる廉の窓　東子

蘭の雪や蝶を夢　昨日和　一京

秋興　亭北
古今聯句　菊の白き夢
松蔭まうら　羊仙
かきつばた　露村
書よむ小窓一炉の菊の花　眠舟
月夜の心　錦糸
元朝　竹志
日光道の　花橋
松風　人

鞍掛と　雪紅葉　惣
掛て栞て山の　遊園
岩写る水の　月琴
竹なれば吹て　鶯吉
居雲や　寄則
暗山も　雪紅
焼栗や　栗拾ふ
松風ふけて　杜の夢　三省
味も　秋味噌汁　魯雪

竹の葉の振まで后秋角　竹立
春立て雪まじり消遊一妹の川　往者
二つ形ち山皆雲て雲河南　赤空
吹立て林を浮めの底ふ風　柳湿
去雁や吹るく妙秋の雲　七下
棟うら雪まで雪まり妹の山　二石
春引の二人ふ雨ふやなまの雪　案孫
秋の雪くくて久雲　雲外

雪の部

雪川雪や小雪や水雪雪立路　苔舟
小雪や破雪ふ雪の新　古友
短冊ふ迄雪小雪　一考
幸社雪藥の際ふ雪　
吾のまて雪雪小雪　雪雄
竹葉の雪雪神雪　来海

初時雨あるうち
晴ゐるや ちり北ぞ
うぐひす葉水ちくま
客水志ま如 叫や
漏ちや 時雨り
里人のうまさ
渡場銭 こゝて
秋らまさ 葉

紅葉
松海
葉越
公紅
一籟
葉山
和香
葉碎

傘寸
松ま ちま
時雨や
赤の 秋神
風乃 吹
吉野 秋森
初雪や
まの雪や

時雨の 程雅
時雨や 三昧
赤坂 壹坊
西明 宛晴
甘枝
山林
石南

初雪や三輪ハ山の鼓世外

雪ま雪ま紅葉の梢ほか　素山

冬枯や一羽残りて雁白旅

たゝなはる雲ハ雪雲露垂

飯蛸よ伽藍ハ紅葉永厩

吹のまゝ屑の雪なり西瓜槻考

吟行

易うして摘ミ残りたる蕨哉　うつ

鳥ぶくら隣ハ皆ゝ出て素柿

日あたりや家垣の中ハ糊仕事

石臼や神さびたる庭梨ハ琴吟

宝つむ水に流るゝ庭菜哉

章生

菜ばたの小ゆるぎの山　章雨

五葉ゆゑ山風ハ松壺

如月千句 峰や風二日 秋元
霞るまでうつる神のちかひかな 荒木
弥まで降る千句の夢や石の新 石新
朝風や桶の生洲の乱れより 雲周
暁の峰方〳〵等きたる 浅水
うす雪や朝よき山の新 楚江
庵に富む風の一野の夢 得山
水音や都まれ 琴角

ちるやてくらく 守考
ゆつくりと春の燈 柏泉
うつ伏て日記書やう三十三才 山光
夜の雪垣根よし〳〵ささ山 甘穎
新ふ降る音くらきに雪香 西寿

朝顔の垣根や雪の 久浅
山の月雪の 玉重

松白

秋園

うた

杜鹿

泉深

角丈

和之助

雪彩

蘆若

寒月やそゝぐも細き山水

雪篝やくゞの篝も雫乃翁

水汲乃小路うまや梅潮ふ

雪梅や咲の雪を驚き義村

ふ獣雪梅ちる日かな年山

手の孫を試てうつ喝風松

雪折や雪のよる時雪兒梢恵

候つゝ
馬もうたを踏せん年雪
蟹の画は
吾うれつゝ
大三十日陸も
大晦日蕎乃新
筆持乃銭箱の

雜之部

自ら絶ゆる雨うて
明日の渡ようこそ思
平砂の岡よあゆみ五ヶ月余り
陰きぬ眺ふこの三の丘 法藏
帆
幹ち葉ち落ち枝ち残 杜森

追加

秋雲 雅笑
うす雲や人のゆくへの定まらず 一葉
雲ちぎれ石をも砕く水の流 指一
雲多き秋空つ雪ふ降 芦川
流れくる魚ふ葉毎 菜毎
雲卷きみてまゐ江の芝 竹友

美紫して志ぐれ　松毬が　杉江
う空ぜまの　雪をまきちらす　兵山
すゝの雪や　行雲の　姫の夢
五月雨や　雲のまの上を　譬の如き
物語　雪も　霧も　一打来
淀雲殿斗　拉ぐ　寒和
ゝもる　山の上　雪の　雫　花柏
ゝる　夕日の　松　女　柱
松　影

物言の　耳に　歌　雪が　一関
歌を　霧よ　つゝ　葉の　色　本二
兵の　本に　ある　を　恋くの　敬紅葉　素英
こたら　野や　都なき　物と　月と　星　一光
ゝり　雪や　酒　帆　春　ゝる　柄園
野ある　星ゝう　畑　ゝの　雪　牡水
外の　雨　雪ゝう　ゝて　静ゝり　之引
若き　春の　ゝり　玉ゝ　海　嶺雄

能登國一宮
氣多神社 祭神
大国主神

鵜祭之圖

鵜祭　十一月午日の祭也　但此祭實祭の翌日也

潔斎　祈誓祭之同

取鵜子　本月丑の日の夜旅宮（今廃社となる）鵜乞神門（今廃社となる）村

鵜浦の神戸百六十一人より四人を出す潔斎して

鵜浦に出て海中にさし出る磐より磯三丁

許りの所羅をもって鵜の首を縛ひて引ゐ上げ

もって赤形の籠（廻り四尺八寸　髪一尺八寸）を作り葬の蓋を庵の赤生絹つゝ

美実体編体を細縄もて結ひ堅め蓋を乾し鵜子の胴ホ

結をつけ籤よ綱を結の端ゝを籤の上帋よ墨重ね備
廿一人の神戸名上下を写一通ゝ名西ゟ東の宅よ集り勢揃ひ
神酒を献ゝ名亜令(亜勢を云ふハ名西ゟ東の略之)
実の日神戸廿一人の内半数の者二人(号を勢ゟ云傳ふゟ云)一人ハ勢ゟの籤を
脊負ひ一人ハ旗よ副て勢浦を発ち山村角鴻村花尾
ゟ送るまゝり所の口(今の七尾ゟ所ハ中野よ至る勢ゟ)
郡宰ゟ到る例ゟ依て白穀一斗二合
吋杉紙一束脊飼百文宮献上の古例之まゝ所の口野ゝを巡回ゟ旅
勢浦着ゟ下りて宮ゟ二酒を(亜勢ゟの籤ハ着の上岡よ掛
置て一ゟ三度て降飼も)
辰の日巳の刻ゟ下ゟ所のゝを発ゝ一良川村よ着る

巳の日巳の刻ゟ下ゟ良川村を発ゝ一金丸村宿那賀神係石
神社よて勢ゟの籤よ本殿四まを右廻く又重丸村役人ゟ勢飼頭
七十ゟ尾を献上まゝ山口来の上例よ一宮氣多神社ゟ到着ゟ一ゝ中門よ
着ゟを一亜勢ゟの籤を中門の左押よ掛置勢ゟを右傳ふ
一人ハ前ゟ後ゟ右傳ふ対ゟ方ゟ取る備楊射馬勢ゟ着ゟを右
ゟ桜井登茂利の宅よ到着ゟ例候よて勢ゟ長ゟ到着ゟまゝ右
勢ゟの御繋舘一泊ゟまゝ
又右取次ゟ勢ゟ着ゟを右ゟまゝ献上ゟまゝ(称唯よて献上物を
乗内ゟ右ゟ着ゟ勢ゟの籤ゟ右遠来よて到着ゟ
対ゟ勢ゟ着ゟ着ゟ称唯よて退出まゝ(亜ゟ名病院
渡殿ゟの宅よ
到り井露立把を献上まゝ緒法桜井家よ同ゝ取次ゟ名勢ゟ着ゟ

二人を召連参る、一、弁馬頭を始め諸役人不残唯一礼ニて
物ニて錫一箇をさし出る、次ニ神主より献上物有之
（献上物の式等ここに記すべきを略す）
巳の日雨の上刻年の日辰の刻年の刻中の刻四度御堀湯汲中門ニ
来りて御堀湯の行事を
年の日勤る、湯釜より年の刻まで勤不申三度解怠を主より咎
止ニて勤不申候堀離をつく、
一、年の日の歌巫の上刻より話所へ参る、福汲来りて
拍中時刻まで居る、鈸鼓、御系りとりて福まで送る、此時各
牙源ニて装束を着ニて社の巫座ニ列り参上座を此

おのれ白散酒の行事より酒人役まで合十枚と七拍の鈸ニて白散
拍子ニて先参の者より列ニて参り一枚酒ニて白散酒をつく、
次ニ参る、酒を加ふ鈸ニて各神ニ備一年竈白散酒ニ土地ニ投薬つ次ニ
神酒の行事より酒人役まで合二枚ニ書ニ載せ神主ニ持参ニて次ニ
破ニて未生ニ於る

次ニ参る、参主殿ニ昇り正面ニ座ニ着く、又各座の東側の棚ニ列ニて白散
酒の行事より次第鈸ニて同一次ニ杜儀ニ参ニて杜儀を始め参ニ列ニ
引酒、次ニ神酒の行事より祝詞鈸ニて同一次ニ酒人役神楽ニ列ニ
神楽ニて神酒をつき杜儀ニ引酒ニ

（杜儀今ハ相撲ノ事ナリ）

次 奏事 奏事ハ内陣ノ号外弁若ハ大庭ノ号ヲ以テ
次 玉串行事
次 再拝 若退拝ヲ若退
次 阿知女祓乗
次 献物舁 若仕奉物ヲ持チ号ノ舁ノ行ヲ称唯シテ每度ノ西例ノ様ヨ
出テ物ヲ受ケ号ノ舁ノ物ヲ受ケ号ヲ称唯シ又若仕奉物ヲ受ケ号ヲ称唯シテ
弁若ハ内侍ノ前ニ跪キ置ク若シ置ク又若仕奉物ヲ
取ル様ニシテ空給ヒ若ハ物ヲ受ケ号ヲ称唯シ又若仕奉物ヲ
受ケテ空給ヒ若ハ物ヲ受ケ号ヲ称唯シ又若仕奉物ヲ
退ク弁若ハ奉ヒテ空給ヒ若ハ物ヲ受ケ号ヲ称唯シ又若仕奉物ノ心ヲ辞ス

次 再拝 若退拝ヲ若退
次 祓詞
次 浅略弁乗
次 再拝 若退
次 退出

カ一巻ヲ取持チ若ハ改テ若ハ若仕奉物ヲ若ハ受ケ号ヲ称唯シテ巻ヲ若ハ物ヲ
取ノ右ノ号ヲ放ヤ若ハ御階ヲ登リ大庭ノ号ヨリ内陣ノ妻ヨリ弁若
ハ妻ヨリ進ム者ヲ垂テ恐拝ヲ止メ時奏ヲ若ハ巻ヲ捧ゲテ
大麻ノ者ヲ受ケ若ハ受ケ終リテ若ハ巻ヲ捧ゲテ
本ノ号ノ西妻ヨリ降ル若仕奉ヲ三下奏ヲ若ハ三下奏ヲ終リテ

右八氣多神社兼摂宮司大貴定久ぬしのもとめまゐらせし由を写
せしなり寛文四年十一月の朔よ称奈神社
吹葦葺八日と等く出雲の宮造の二字を除て一社造兼時記かゝも
証歌ひのあやと云ふ社号の次何ふよりて影宮を勧む神歌の
事ハたゝくゆきてをきおきをしるべ給ふ詞なり
年ごふ行ひ給ふ人のおよそ行ハゆきまゐ
あしつるなり

明治十六年写

楢柯導志舎蔵

序

怪魔ものゝあるハ
ゆくまゝを去ものゝあるハ
源氏ふみ秋と引まて能
しるの黒きへ梅の
如くなる釣もの枝ハ
神私の事ハ雑文ゝ

富田藏書